

近世地方神職と和歌

——『巨勢總社千首』の一考察——

都立上野高校教諭

中澤伸弘

一、『巨勢總社千首』

近世の所謂國學の地方への傳播と言ふ事に就ては、地方の神職がその一端を擔つていたと言はれる。國學と言ふものが我國の古典に據つて、我國人の古き心ばへを考へ、そこに我國固有のものを考へようとしたものであればこそ、神職が奉ずる所の神の道の教への正しさを説く國學と言ふものが、學問研究の對象となつた事は當然の事であつた。然し乍ら江戸期近世の神職、わけても地方神職が果してどの様な研究をし、どの様な組織の下で如何なる活躍をしてゐたかと言ふ事は、その史料の尠きによつてか、あまり顧られてはゐない現状である。官學と言へば儒教一邊倒の時代で、加へて寺請制度の厳しかつた頃ゆゑに社家神職と雖も寺院の檀家と言ふ組織の下に拘束せられてゐたのであつた。社家神職が離壇を主張し、漸く神葬祭を齋行する事が可能となるのは、更に時代の下降が必要だつたのである。それとて社家の長一人に限られ家族親族は神葬祭にあづかる事はなかつたのである。山伏修驗や陰陽師もゐた時代である。その様な狀況の中から國學の影響を受けて、神職の活躍も盛んになつていつた筈である。古典を學び和歌を詠

ずる神職が現れるのは當然の事であつた。

『巨勢總社千首』と言ふ和歌集がある。美作國英多郡巨勢郷下倉敷村巨勢總社神主である大澤深臣が安政四年に刊行したものである。『國書總目録』には、

巨勢總社千首 一冊 ①和歌 ②大澤深臣編 ③安政四刊 ④岡山市 正宗 無窮神習

と記されてゐる。これに據ると内容等は先述の通りであるが、その版本は岡山市立圖書館、正宗敦夫氏、無窮會神習文庫に收めるだけの稀觀書であると判る。(勿論目録化されてゐない個人所藏の物は不明だが)

ところが先日、某古書展に於て『巨勢總社千首二篇』と言ふ本を購入し、架藏に歸した。早速無窮會の神習文庫の井上頼因舊儲本と比べてみると内容は全く違つてゐて、神習文庫本は初編、架藏のものは二編である事が判明した。

『國書總目録』は同名の書冊でも内容の相違する二篇三篇が刊行されてゐた場合は、紛れる事のない様にその旨も細かに記してゐる點からみると、架藏の本である『巨勢總社千首二篇』は『國書總目録』未著録の書物であり、またも稀觀書であると言へる。加へてこの初篇、二篇は何れも卷末に歌を出詠掲載した「歌人姓名録」を記し、その歌人それぞれの當時の住所及び身分(職業)を記してゐて出詠者の狀況が判り貴重である。二篇は「安政五年九月二十日 神主大澤深臣輯」との奥書がある事より、初篇刊行の安政四年の翌年に刊行された事となる。

因みに初篇(神習文庫本請求番號一〇五六七 以下甲)と二篇(架藏本 以下乙)の書誌を示せば次の通りである。本の大きさに就ては甲乙共にほぼ同じであり、縦二五糎、横一八糎、題簽は甲乙共子持ち郭中に「巨勢總社千首」と記し、初篇二篇の區別は記してゐない。内題が甲は「美作國英多郡巨勢郷總社千首」とし、乙は「美作國英多郡巨勢郷總社千首二編」となつてゐる。以下甲乙共丁數本文九丁で、五十人による五十首の歌を春の詠から始めて普通の歌集の如くに春夏秋冬雜の順に並べてゐる。また甲乙共に内題と歌の前に、

此ハよみ人のたかき賤しきをわかず 歌の好きあしきを撰ばず はやく納め奉れるよりしるし始めて五十首づ、

如此ものせるになも (濁黙原文ナシ)

との説明が記されてゐる。歌のあとに奥書は甲が「安政四年十二月六日 神主大澤深臣輯」乙が「安政五年九月二十日 神主大澤深臣輯」とあり、序跋もない爲に何の目的で編まれたものかも判らないのである。歌數は一卷に五十首なので初篇二篇合はせて百首で題名の千首にはなほ及ばない。また三篇以下が刊行されたかも判らない。そして、この歌集の編纂の意圖は、安政期に大澤深臣の奉仕する巨勢總社に於て何かしらの記念行事が行なはれ、それに伴ひ和歌の奉納(獻詠)が行なはれ、それを輯録刊行したものの可能性もあるが後述する考察からは奉納和歌とも思へぬ點もある。先述の「はやく納め奉れるよりしるし始めて五十首づゝ如此もの」すと言ふ事が奉納和歌たる事を示してゐるとも見られるが、歌題は全て統一されてをらず、必ずしも神社奉納の歌とは思へぬものもあつていかかと思ふのである。

奥書の次は甲乙共に歌人姓名録を三丁に互り各五十人を記すのである。初篇はその全てに互つて名前、住所(職身分)(姓(通稱)を記すが、二篇は「初編二編作者重出者略地名若俗稱」との註記が施されて、重出する者は名と姓だけになつてゐる。さうすると初篇二篇でのべ百人の數であるが重出者分を除くと計七十人と言ふ事になる。(表、参照) ついで甲は最終丁に「巨勢文舎藏版」と記し、乙は「青柳堂藏版」と記す。この歌集がこの地域にどのくらゐ刷り立てられて頒布されたかは未詳であるが、巨勢文舎は巨勢總社神職大澤深臣の事を目指し私家版の意味であらうか。二篇の青柳堂は出版元であらうか、これも不明のまゝである。編者大澤深臣に就ても詳細は判らない。『和學者總覽』は「岡山縣人名辭書」を引いてその名を記すが平賀元義門と記すのみで歿年も不明である。ただ、後述する平賀元義門人帳である「楯之舎門人名簿」に記す所は、

美作國英多郡巨勢郷下倉敷村巨勢總社神主 本國備前國赤坂 年二十六 大澤播磨藤原深臣 嘉永三年八月十三日

(入門)

とあつて、嘉永三年に平賀元義に入門した時は二十六歳であつたと言ふ。

筆者は實際に現地に行つての踏査をしてゐない爲に、巨勢總社が現在どの様になつてゐるかも判らず、また裔孫の方の存在も知らずにあるが、踏査をすれば何かしら得られるのではないかと思つてゐる。ともかく考察をすゝめてみたい。

二、出詠歌人について

『巨勢總社千首』初篇二篇に歌を掲載してゐる歌人は七十人であり、それを初篇は無窮會本、二篇は架藏本により、重出作者分を除いて一覽にしたものが〈表〉である。ほゞ翻刻に近い状態で氏名、住所（身分職業）姓をそのまま記しまとめてみた。

この表を見て判る事は、七十人中半数以上の四十六人が美作國人で、あとは備前國八人、因幡國四人、播磨國四人、出雲國三人、讃岐國二名、伯耆國一名、日向國一名、備中國一名となつてゐる。日向國の泰龍法師一名は異例であるが、他は大方美作を中心とした附近に住む人の詠であると言へる。即ち美作を中心に限られた地方の歌人群である。この異例の泰龍法師に就ては二篇に次の如き歌が記されてゐる。

久山好雄を訪ひて

草枕旅はいそげど風流の門をたゞにもゆかしとぞ思ふ

であつて、本歌集に出詠してゐる久山好雄（表番號47）を訪問した時の詠であり、その點では日向に住むとは言へ、志を同じくした者として扱へるであらう。

次に歌人の身分職業を考察してみると半数に近い三十三名の者が神職である。また姓や住居地などから考へて神職

と同族と思へる人物もある。その他武士が七名、醫師が七名、里正一人、法師一人で、他は村民、即ち神職の奉仕する各社の氏子でもあらうか。即ちこの『巨勢總社千首』は美作附近といふ限られた地方の神職の歌集群であるとも言へる。この様な歌集は珍しい事であり、何故この様な事になつたのであらうか。

そこで考へねばならぬ事は、當時のこの地域の歌壇、更にはそれを率ゐた國學者の存在である。

前述の大澤深臣が入門し、師と仰いだ平賀元義は幕末、寛政十二年から慶應元年に生きた國學者であり歌人であつた。岡山地方を地盤とし安政四年六月に美作國勝田郡飯岡村に家塾楯之舎を創設し、美作近邊に門弟を擁し、國學和歌を教授した。故あつて二年後の安政六年家塾を閉ぢたといへ、その後も門弟の家に寄宿放浪してその教授に倦む事なかつたと言ふ。この平賀元義の行狀や著書、また詠歌に就いては、一地方の歌人として埋もれてゐたのを、明治中期に正岡子規が、その詠歌歌體の萬葉調なるを稱揚して以來、中央にも聞える歌人としての地位を得た。歿後三十年餘を経ての事であつた。爲に平賀元義の傳記資料は乏しく、『國學者傳記集成』に於ても昭和八年の續篇の編纂に當り收録されるもわづかに二頁に及ぶものでしかない。その後郷土の先人を顯彰せむと、岡山の羽生永明氏はその調査を徹底して行なひ、大著『平賀元義』を著はしたものの、其の原稿も當時は刊行に至らず、長く篋底に秘され空しく時を過ごし、著者亦永逝と言つた事態ともなつた。而して昭和六一年にこの原稿が刊行（山陽新聞社）され、やつと平賀元義研究の材料が粗上に置かれた状況にある。本稿も羽生氏の研究に負ふ所が多く、その著書も參觀した。

扱て平賀元義と言ふと『國史大事典』にも『國學者傳記集成』（續編）にも、「性偏矯」と記す。「人と和するを好まず、交友とて殆ど無」かつたと言ふ。その奇行に就ては、

性粗漫豪放にして偏奇なりき。従つて長上に阿りて聞達を求めず職につけと勸むるも肯せず放漫不羈の生活をよろこぶ。長上と雖も所思に反すれば、特に國體に關することに於ては口角泡を飛ばして議論し、何時にても果合をなす意氣込みには何人も辟易す。尙大の朝寢坊にして潔癖家、又た色を好むこと狂態に近きものありたれど些

の邪氣なく常に大丈夫を以て任じ、世に奇行家として傳へらるる所以なり。〔國學者傳記集成〕續編

と傳へられる程である。元來傳記には事實はなかつた風聞も事實になる事はあるとしても、火のない所に煙は立たぬとしてこの記事より大方の生き方が推測される。家塾楯之舎を二年で閉ぢ、門弟の家に寄宿したのもかゝる性癖による爲であらう。然し時代の變化の激しい幕末と言ふ過渡期に於いては、やはり世直しといふ意味あひからか、かゝる奇行の人士が尊ばれたのであり、人々の注目する所であつたと言へる。平賀元義には單なる奇行の人士と言ふよりも、内に秘める迫力が存し、幕末の世上不安の時代も打破するに能ふ何かを漂はせてゐたのであらう。ゆゑに「交友の殆ど無」かつた彼が「師友とも見るべきものに、業合大枝、小寺清之、大宮圖書（備後）、齋藤貞篤（鳥取）、關梟翁、萩原廣道、大西景枝（讃岐）、河野鐵兜（播磨）、清水谷右中將（京都）、千家尊孫（出雲）、大國隆正（大阪）などあり」〔國學者傳記集成〕續編、なほ羽生氏著『平賀元義』には更に交遊のあつた人物を詳細に記してゐる。と記されるのも不思議ではない。さればなほのこと門人を多く擁することも出來たのであり、更に『國學者傳記集成』（續編）が「弟子」として、「大國隆正、井上信滿、中川寛、大澤深臣、三輪神五郎、矢吹林太郎等世に知らる、美作、備中、備前の諸國に百數十名、出雲、常陸、播磨、讃岐國に數名あり」と記してゐるのも肯げよう。大國隆正は師友であり門人であつたのであらうか。大澤深臣はこの『巨勢總社千首』の編輯者、三輪神五郎は勝田郡の神職で、歌人姓名録（表番號50）に記される人物、矢吹林太郎も同じく（表番號28）の人物であり、『巨勢總社千首』に關りがある。それのみか、『國學者傳記集成』の記す門弟の範圍は、本書『巨勢總社千首』に和歌を出詠してゐる人物の分布範圍と重なるのである。また元義は慶應元年十二月廿八日、寄宿先の門弟中山縫殿介宅から同じく門弟前川清彦の所へ訪ふ途中に路傍の小溝に落ちて凍死したと傳へる。不遇の死ではあつたが、この前川清彦は、（表番號22）の前川清廣の同族であると言ふ。

さてそこで再び表の「巨勢總社千首歌人姓名録」を見てみよう。氏名上の◎印は、前記羽生氏の『平賀元義』の著

によつて門人とされる者である。その中で平賀元義門に入門した年月日の判明する者はそれを記しておいた。(同著二四四頁以下に記す「楯之舍門人名簿」に據る。ただこの名簿に就ては羽生氏が編纂したものであり、元義自らの手になるものではないと言ふ、即ち羽生氏は「彼は天保十四年以前には『門人名簿』を作らざりしか。又は作りたりとも、此の時は已に紛失し居たりしか。なほ天保十四年以後のものとても、弘化二年までのものは、錯簡をあつめて一冊としたるもの。又、弘化三年より安政二年迄の分は、綴りもせで、ただ紙袋に入れたるものなれば、元義歿後、此等の名簿は反故として取り扱はれ、或は障壁の下貼などに用ひられて、何時しかありし十が一にも足らずなりぬ。されど其の纒に残れるが長濱氏の許にありしを、著者は先年、長濱氏を訪ひてこれを一見することを得たり。今、年月を追ひてこれを列記し、左の八十七名を數へ得たり。」と記す。この名簿に未著録の門人も多くゐたのではあるまいか。)それによると門人は弘化、嘉永、安政期に集中してゐる。『巨勢總社千首』出詠者七十名のうち、門人とはつきりと認められるもの三十四名と半數に近く、門人でありながら「門人帳」が散逸して、今でははつきりしてゐない者も出詠者にあるかもしれぬ。そのうち弘化四年入門者は四人、以下嘉永元年二人、同二年五人、同三年四人、同四年二人。同五年一人、同六年一人、とんで安政四年三人、同五年一人、入門年月不明十一人となつてゐて、こゝからも窺へる事は弘化四年から嘉永の初年にかけての入門者が、この歌集には多い事が言へる。先述の如く元義が楯之舎を家塾として開いたのが安政四年であつたとすると少なくとも家塾として開設する以前にも國學の教授がこの地域に行なはれてゐたのであらう。この歌集に名を連ねる門人三十四人中、神職である者は二十二名の多きを數へるのである。少くともこの地方の神職に平賀元義の教へが浸透し、また歌の道にも専念し、歌集を編むと言ふ事に應じる力量はあつた事が推測できる。更に言へば、それらの人の入門時の年齢である、十歳臺二十歳臺と言ふ若さが目立つのは、幕末期の不安定な時代に、元義の個性に世直しの理想を見た若者の心理だつたのかもしれない。例へば姓名録番號31の赤木盛常は神職であると共に元義の影響を多分に受けた者であつた。慶應四年正月に吉田三位の召によつて中川寛ら

と謀り、上京して内侍所を守衛し、同年三月比叡山に登り日吉神社の神佛分離の強行に加はつたと言ふ。彼の詠に、
佛教信者

皇國の正しき神の道しらすでさかしき道にふみまよふ人

日吉神社除佛終へて

比叡の山塵は流れて夕立の跡すがくし神の廣前

(二首共に羽生氏の著による)

とあるのも、氣慨の盛んな様子が知られる。この時の同志の中川寛は姓名録番號46の中川清彦の養子である。中川寛は慶應三年八月に近郷の神職十數名と「榊組」を組織したと言ひ、その長になつた人物である。この榊組の結成にはやはり元義門下の神職の結束があつた事が證せられよう。彼は比叡山の神佛分離にも加はり、明治維新後に歸國して教導職兼補の命を受け、大教宣布に従事し、更に美作に戻り神職に神典、國學を傳授したと言ふ。斯様な秀れた門人も出たのである。平賀元義の影響のあらはれである。

また神職のみならず醫師が六人を占めてゐるのも興味深い。元來國學者には本居宣長もさうであつたが(其他平田篤胤、權田直助もさうであるが)、醫師、醫學に就ての造詣を有する者もゐるのである。平賀元義に就ても醫學の研究があつた様である。羽生氏の著によると久山好雄(姓名録番號47)の宅にて『大同類聚方』を寫したと傳へてゐる。また同著には「平賀元義の醫學」と言ふ項目を立てて、元義が幼少にして醫學と關聯が深かつた事をはじめ、その著述に就ても詳細に記してゐる。その點を考へると醫師との交流も考へられるものである。

叙上この歌人姓名録には平賀元義門の楯之舍塾なしでは語られぬ人物が多く記されてゐる。塾は勝田郡に開いたと言ひ、そのゆゑに美作國と言ふ山間の地に國學が榮えたのであつた。歌集に録する美作國人の多きも之によるのであるが、一國學者の影響の大なりし事は之によつてよく理解できる事と思はれる。

三、『巨勢總社千首』の歌

では『巨勢總社千首』に記す歌の中から興味あるものを引いて置かう。元義の門であると言ふ事は、歌も元義に學んだのであらうが、元義は歌を「本領はわが古學にありて和歌は餘技に過ぎざりき」と言つたと言ふ。美作の隣國である吉備國は早くに歌學が興り、藤井高尚は古今集による一派を既に形成し、また備中の木下幸文は桂園派に屬してゐた。元義は藤井高尚の高足、業合大枝に就いて學んだものの、その歌風に飽き足らず萬葉調を好んで獨學によつて歌道を大成したと言ふ。即ち本歌集に載せる門人の詠は、言はば元義流の萬葉調の調べを有する歌とも言へよう。

嘉永六年亞墨利加の賊責來るよし女童どものいふをき、て

中川清彦

身はさけて骨はちるとも君のため國のためには火にも水にも

これは天石門別神社神主の中川清彦の詠であるが、美作國と言ふ地方にあつても、浦賀のペルリ來航の事を聞いての憤りが、今も傳つて來る詠みぶりである。當地の神職にはかゝる思ひが潮漣としてゐたのであらう。更に同じく中川清彦は二篇に於て、

からふねまゐくるよしき、て

中川清彦

大君のゐます御國ぞうなねつきをろがみまつれ醜のさかしら

といふ激しい歌を詠じてゐる。また斯様な詠もある。

わが郷の大宮は掛まくも畏き後醍醐の天皇命大御輿停め給ひて櫻みそなはしし處なり 其宮にまゐり出で

矢吹經正

いにしへの大御みでましおもほへは櫻ちるなり和氣の大宮

この歌は元弘の昔の後醍醐天皇の隱岐御遷幸の途次、こゝに御駐輦ありし故事に基いて詠じたものであらう。我が國

史への回顧と、そこに湧く戀關の情はただならぬ響きのある歌となつてゐる。

奈良へ行ける時

大塚盛寛

出ましのおほみ車のあとたえていく代へにけむ奈良の大路は

天皇の舊都奈良行幸は絶えてない事であり、江戸期には京都市中にも行幸は叶はぬ状況であつた。この歌、平安遷都以後の世の様を嘆いてゐるのであらうか。何れにしろ現實の大和行幸のない事への憤りがあらはれてゐる。

安政三年の春安房の國の防人になりて備前の國岡山の城のへを出立とて

横田鬼彦

遙々とおもへば遠き旅ながら心の駒はいさみ立けり

岡山藩士横田鬼彦は安房へ海防警備の任を帯びて立つのである。その様な萬葉集の防人歌になぞらへて詠じてゐて、勇ましいものである。

大砲のわざを

大西啓行

千萬の軍なりとも忽にうちころすべきこれの火のわざ

これは萬葉調の雄大な歌である。また、

異國のよこさのをしへを

小谷古蔭

えみしらがとりの羽根をもてつくといふふみよこさの道はなにせむ

鳥取藩士小谷古蔭も外國に對して激しい口調の歌をとどめてゐる。

萬葉調の歌としての特色としては言葉を飾らぬ純粹・素朴の詠と言へるが、また長歌がある。本歌集もそれに漏れず、に長歌を多く収める點に特色がある。その幾つかを記してみると、

備前の國和氣の郡益原の郷矢田の村延岡の母刀自の六十の賀によめるうた 延岡壽子

玉ほこの道は遠けど たらちねの母の命を 萬代に幸くまさせと 石の上わか故郷の 石つ別天つ御神に 朝よ

ひにねがふ心ハ 天地の神もしるらむ あら玉の年老ませと 御面輪のうつらずいまし 天地と日月と共に 遠
長く久しくいませ母の命ハ

秋のうたの中に

横山裕房

斧取りて高島山の 末こりきて酒をあたたためて 友待てど友は出来ず よしゑやし友はこずとも よしゑやし人
は来ずとも われ獨り今宵の月に 飲み酔ひて うたひ遊ばむ友は来ずとも
ともに格調ある歌ひぶりて、『萬葉集』の歌に倣つてゐる。

神事に關するものとしては斯様なものがある。

年のはに正月十六日みまさかの國人とも弓削の神戸なる大慶山に獵して鹿二ツ獲て 一ツハ一の宮正三位中
山の大社へ獻り 一ツハ其郷の志呂の神へ獻るを神の宮人ども庖丁して其大神の御贄に備へ奉る事古よりの
例なるよし聞て

久山好雄

大慶の山のさ男鹿いつよりか神の御贄に仕へそめけむ

この歌の詞書がなかなか興味深い。生饌を供へる様になつた明治以降の神社祭式を思ふ時に、神職が鹿を調理して神
に供へた古き例がうかがへる。美作は山の國である。鹿は山の幸である。

また、平賀元義の楯之舎についての歌も收める。

安政四年四月十一日大澤深臣が伊豫の國へ行くを送りて

熊野意宇麻呂

いよ人のとへば答へよ楯の舎の木のくわしげき道八十くま

こゝに言ふ伊豫人は矢野玄道であらうか、想像がふくらむものである。

出雲の國熊野意宇麻呂 楯の舎の塾に在けるに安政四年十二月本つ國に歸りければ

磯山久麻呂

百年も千とせも共にあそばむとおもひし君に立わかれつ、

熊野意宇麻呂は嘉永五年に十七歳で楯之舎に入門したので、安政四年當時は二十二歳である。同様な歌は、

出雲の國熊野意宇麻呂の わが師楯の舎の大人の塾に在けるが 故郷に還るとて其形見にと塾の庭に栽植し
ひ、ら木を故ありてわがやどにうつし栽たる後によめるうた 岡本氏廣

玉くしげ二心なき 丈夫の形見に見よと 栽植し宿のひ、ら木 六月の照る日にあへど 三雪ふる冬の來れど
其色のかはる事なく 常とハにいや榮えつ、 朝な朝な見れどもあかず 丈夫の形見の木ぞと 萬代にいひ殘申
さむ宿のひ、ら木

楯之舎に形見に柊を植ゑたと言ふも、この故ありては多分、楯之舎閉鎖の事を指すのであらう。それで植ゑ替へをしたのであらう。また、當時敬神の念厚く神社參拜の時の歌も多い。

秋の夜みまさかの國巨勢の總社にまゐでて 井上宗續

みまさかやあかたの河原河のぼり巨勢の社に月を見るかも

備前國兒嶋の郡賀茂の郷早瀧比咩の社にまゐでて 中川正遊

瀧ひめの神のくりだす早瀧の瀧つ白絲見れどあかぬかも

安政四年十一月三日出雲の國意宇の郷大草の郷正二位勲七等須賀の熊野の大神にまゐでて 大澤深臣

八雲たつ出雲の國に 神の宮さはにあれども 須賀の山熊野の宮は 櫛御食野神の命の 妻ごみにこもり給ひて
八雲たつ出雲八重垣 妻ごみに八重垣つくと 神ながらうたひ給ひし 八雲たつ其大宮ぞ かけまくもかしこ
く有けり いはまくも尊く有けり此大宮は

歌の引用が長くなつたものの、大方これで『巨勢總社千首』の歌の調べが理解できる事と思ふ。長歌の反歌が伴はない事もこの不思議な歌集の特色と言へる。紋上の點から『巨勢總社千首』は稀なる歌群と言へるだらう。神社に納められたのではなく最初から歌集として編む企畫で始められたものであらう。ゆゑに獻詠とは言へぬ様々の歌が收め

られてゐて、その何れもが萬葉調の、時には激しく、時には素朴な歌の調べとなり、その歌群となつてゐるのである。

四、類題集刊行期との關係

先述した通り、何の故を以て『巨勢總社千首』が編まれたかは今の所では明らかではない。しかしこの刊行には當時世上で行なはれてゐた各種の類題和歌集の影響が少なからずあつた事と思はれる。歌題を他の類題集の様に限定せず長い詞書とするのは本歌集の特色ではあるが、一應は四季の部立てから立てられてゐる。また一篇二篇ともに「作者姓名録」を有する事は、當時世上に行なはれてゐた他の類題和歌集の殆どが「作者姓名録」を附してゐる事に倣つた事は論を俟たない。

類題和歌集とは、歌の題ごとに例へば春部・夏部・秋部・冬部・戀部・雜部と分け、更にそれぞれの部立の中を細かな題ごとに歌をまとめたものである。はやく下河邊長流が『林葉累塵集』を寛文十年に刊行し、詠歌の手本とし、下つて元祿期には頓阿の『草庵和歌類題集』が刊行されてゐる。文化文政の頃になるとその編輯刊行がや、盛んとなり、國學の盛行と共にその和歌作詠の手引書として盛んに作られた。例へば清原雄風編の『類題伶野集』、川島運阿の『紅塵和歌集類題』などはそれであるが、何れも中世の古類の歌を類題してゐたのである。それに比して木村定良編の『草野集類題』は江戸期の契沖以下の作者と言つた近い時代の歌類を類題編纂したものであつた。

その後紀州の加納諸平は『類題鯨玉集』を編み、更に京都の長澤伴雄は『類題鴨川集』を編んだのであつた。これら二つの類題集は従來の故人の詠を編んだのとは違ひ、中央地方の各地の歌壇社中へ案内を廻し現存者の歌を集めたのであつた。卷末に作者姓名録を記す事はこれが爲に地方の名の知れぬ歌人を、讀む人に判らせる爲でもあつた。このやり方は當時としては大變注目せられ、『類題鯨玉集』は七篇、『類題鴨川集』は八篇まで編まれたのであつた。

『類題鯨玉集』は作者姓名録を一冊の本としても刊行してゐる。これらの類題集が他の様々な類題集刊行の誘ひ水と

なつた事は言ふまでもない。全国的に歌を集めたもの、また或る地域に限つて作られたものとそれは様々であり、その量は福井久藏著『大日本歌書綜覽』の類題集の部を見れば實に多い事が判る。更にそれは明治中期まで行なはれてゐたのであつた。勿論出版事情の好轉も考へねばならないが天下に自らの歌を示し、またその存在を訴へる恰好の場ともなつたのである。

そしてまた『巨勢總社千首』に名を連ねる鳥取の加智彌神社の神職飯田秀雄、同じく年平の親子の存在も見逃せぬであらう。編者大澤深臣も神職であるゆゑに相互の交流はあつたであらう。そしてこの飯田親子は先述の『類題鮎玉集』を刊行した加納諸平の門下であり、紀洲の加納家に滞在して『類題鮎玉集』の編輯の手傳ひをした人物である。更に年平は維新後に神祇官に出仕し、同郷の門脇重綾と共に明治天皇大嘗祭に際して主基方の風俗歌を詠じてゐる。かゝる人物の存在があつて、その影響下に編まれた歌集であつたと推考される。なぜならば後述する『類題吉備國歌集』には歌人姓名録がないからである。

『巨勢總社千首』の刊行に先立つ數年前の嘉永期に隣國の吉備地方の歌人を集めた類題集として『類題吉備國歌集』が刊行されてゐる（刊行年は明記せられてゐない）。編輯者は藤井尙澄であり、當時の吉備（備前備中備後）の歌人を收め、上下二冊となつてゐる。ただ歌人姓名録がなく檢索に不便ではあるが、『巨勢總社千首』に記す備前・備中の歌人を重複して載せてゐない點も特色であらう。隣國でのこの歌集の刊行が大澤深臣に與へた影響は大きかつたであらう。とは言へ大澤深臣は地方の一神職であり、他の類題集の如く多くの歌人を集めて刊行するにはそれなりの費用も必要であり、また年月も要する。そこでまづ近郷近在の知れる者神職といふ組織、または同門、平賀元義楯之舎に連る者の詠、それも萬葉調を有して、他の桂園派とはまた趣を異にする歌を集めたのではなからうか。師である元義の詠がないのも、門弟として師を憚つた事だらうか。一度に多くの歌が集まらぬ爲か、一冊に五十首ずつ集まつた順に刊行したのであらう。二篇までは刊行されたが、その續きに就ては不明である。

敘上世に顧みられないでゐた一地方の和歌集の紹介を兼ねて一文を草して見た。一地方の國學者の影響を歌の調べ、そして地域教化、または地方神職の關係と結束など様々の問題が浮ぶであらう。

現地を踏査すればなほ詳細を知り得るかもしれないが、架蔵の一冊をめぐつて思ひつく所を記した。博雅の御示教を仰ぎたい。

(本稿は舊漢字使用。印刷の都合で必ずしも統一はとられていない)

巨勢總社十首 歌人姓名録

一、初編は、無窮會藏本により、一篇は架蔵本による。一、通し番号の○印は、美作国人である事を示す。一、氏名上の◎印は、平賀元義の楯之舍村中の者である事を示す。一、漢字は現行の字体を用ゐた。

(初編)

番号	歌人姓名	神職	武士	其他	備考 (入門年月日と入門時年齢)
①	寿磨	○			嘉永三年九月二十九日入門
②	友貞	○			嘉永元年六月十日入門
3	道篤	○			嘉永二年三月十八日入門
4	久孝	○			28
⑤	重臣	○			19
⑥	重磨	○			
⑦	恒磨	○			
⑧	則忠	○			
⑨	光遠	○			
⑩	初種	○			
⑪	光子	○			
⑫	多頼朝臣	○			
⑬	弟久	○			
⑭	広路	○			
⑮	義久	○			
⑯	養子	○			
⑰	幾子	○			
⑱	早穂	○			
20	久磨	○			
21	義武	○			
22	清広	○			
23	俊義 (嘉)	○			
24	重布留 (旧)	○			嘉永二年五月十二日入門
	勝田郡和氣郷高比野社神主				
	勝田郡吉野郷美野村社務				
	出雲国楯縫郡美談郷美談村				
	備前国上道郡宇治郷湊村神主				
	苦東郡高倉郷 従五位上 天佐々社社司				
	久米郡坪和郷西坪和村坪和三宮社司				
	粟井郷馬形村				
	栗井郷馬形村				
	勝田郡塩湯郷鷹鷹社神主				
	粟井郡馬形村				
	苦東郡一宮村正二位中山大社神主				
	久米郡倭文郷倭文社神主				
	英多郡川会郷福本村				
	英多郡川会郷上山村				
	広井郷田殿村医				
	勝田郡和氣郷行延村				
	勝田郡塩湯郷稻穂村				
	英多郡川会郷香合村神主				
	出雲国楯縫郡美談郷美談村美談社神主				
	播磨国龍野藩中				
	備前国上道郡財田郷天神社神主				
	勝田郡和氣郷高此野社神主				
	苦東郡一宮村正三位中山大社神官				
	岡本対馬				
	長尾津守				
	水 国藏				
	岡 多門				
	高山播磨				
	矢木土佐				
	藤森周輔				
	豊福清一郎				
	香西十六夫				
	前田長門				
	豊福三平妻				
	中島棋津守				
	為貞直記				
	遠藤万介				
	高原四郎兵衛				
	久山宗碩妻				
	矢吹林太郎妹				
	西村齋助				
	磯山出雲				
	高橋速江				
	熊沢権右エ門				
	前川左仲				
	岡本和泉				
	松岡対馬				

